

柿本朝臣人麻呂、妻の死にし後に、泣血哀慟

して作る歌二首 并せて短歌

二〇七番

天飛ぶや 軽の道は 我妹子が 里にしあれば ねもこ
ろに 見まく欲しけど やまず行かば 人目を多み ま
ねく行かば 人知りぬべみ さね葛 後も逢はむと
大舟の 思ひ頼みて 玉かぎる 磐垣淵の 隠りのみ
恋ひつつあるに 渡る日の 暮れぬるがごと 照る月の
雲隠ること 沖つ藻の なびきし妹は 黄葉の 過ぎて
去にきと 玉梓の 使ひの言へば 梓弓 音に聞きて
言はむすべ せむすべ知らに 音のみを 聞きてありえ
ねば 我が恋ふる 千重の一重も 慰もる 心もありや
と 我妹子が やまず出で見し 軽の市に 我が立ち聞
けば 玉だすき 畝傍の山に 鳴く鳥の 声も聞こえず
玉梓の 道行き人も ひとりだに 似てし行かねば す
べをなみ 妹が名呼びて 袖そ振りつる